

定年後の生活、自分史

高齢化社会になり、世の中に高齢者が増えている。高齢者の日々の過ごし方はさまざまである。現役時代に働き切ったと考え悠々自適の生活を送る人もいれば、まだ元気で働き続けたいと考えている人もいる。大学や会社など組織には定年というものがあり、人は定年後の違った生き方を余儀なくされる。定年後の生活について、知人や自分のことも含めて振り替えたものを集めてみた。若い人にとって定年後などまだ遠い先のことで興味はないであろうが、高齢者の生き様やその軌跡を知ることは、自分のキャリアを考えるうえで役立つこともあるであろう。

1 暇について

同世代の友人と、メールで近況などを報告し合っている中で、「暇って何」ということが話題になった。友人は、実直な人で、暇については、「人生に無駄なことは一つもない」「何もしない時間にも意味はある」「勤勉さや真面目さの結果として得られる暇は人生の果実・ご褒美」など、その素直で穏やかな人柄を表す意見を送ってくれた。「武内さんは暇の哲学についてどう考えます？」と聞かれ、私は、その質問の核心には触れられず、その周囲のことを、あれこれ述べるだけで終わってしまった。(一部転載)

く私は、哲学は苦手な人で、暇についても、哲学的な考察は全くできません。でも、文化的な考察は好きで、京都学派の人(多田道太郎、作田啓一、井上俊など)の本は、よく読みました。そこには、暇や怠惰についての考察がたくさんありました。確か、働かず何もしないでぶらぶらしている若者に、年寄りが「なぜ働かないのか？」と聞いたら、その若者は「働くといいことありますか？」と質問し、年寄りは「お金がたまり好きなことやのんびりできる」と答えると、その若者は「もう好きなこと、のんびりしています」と答えたという話を、多田道太郎が書いていました。関東と関西の学問の学風は違うと思います。関東は役立つことをして、関西は暇や楽しいことを大切にするように思います。

暇に関しては、社会階層も関係していると思います。食べるために暇なく働き続けてきた親を見て育った中以下の階層の子どもは、勤勉という価値を内面化し、暇にすると罪悪感をいだくのではないのでしょうか。また世代も関係し、若い世代は、余裕のある贅沢な生活が当たり前で、働くより暇にして好きなことをすることに価値や生きがいを感じているように思います。

社会学者の副田義也先生が、遊んでばかりいる大学生でも大学に通う意味はあって、もし彼らが大学に入学せず、社会に出てしまったら、どのような犯罪に走るかわからない。大学は、「時間の浪費の制度化」をしているところあって、退屈で時間を持て余す若者の、犯罪防止制度としての十分機能している。そのような趣旨の考察を、マンガ『嗚呼・花の応援団』

の分析でしていました（『遊びの社会学』）。

その中でも言及されていたが、退職した老人が多くなって、そのまま放置しておいたら、不良老人たちが何をしでかすかわからない。卓球でも、絵でもいいが、さらに害のない「ブログ」を書かせたり、読ませたりさせておけば、社会への不満や批判に目がいかず、今の社会（体制）は安泰である。私のブログは、そのような社会の安全弁機能、社会体制維持機能を果たしているのかもしれない。（ただ、読者は少ないし、そんな影響はないのだから、所詮この議論も、暇つぶし） >（2021年5月24日）

2 定年後の生活

一人の友人は、定年後の生活に関して、次のように書いている。

<人の「一生」は短いものです。そんなことを考えると、今までの生活とは全く違う形の生活を想い描いてみたりします。いわゆる仕事からは全て身を引き、「街を歩き、いろいろ自然の中へ出かけ、本を読み、思索に耽り、また家事をこなし・・・」、そんな方が人間的なのではないかと。仕事は確かにいろいろ魅力を持っています。自己実現、自己表出の機会であり、自分が社会に必要とされていると感じられることは、人間にとってとても大きなことなのでしょう。ただ、「仕事は人生の最良の糧であり、同時に麻薬なのかも知れない・・・」、などと考えたりもするのです。 >

上記の意見に、3分の1くらいは共感し、3分の2くらいは違うのではないと思う。

第1に、定年後そのような優雅な生活を送る為には、貯えがなければ無理である。今の年金額はだけでは、そのような好きなことをすることも好きなところに出かけることもできない。

第2に人はだいたい怠け者で、義務がなくなると、ずぼらな生活を送ってしまう。毎日が日曜日になると、読書や思索や運動をしようとしなくなるのではないか。「～への自由」ではなく「～からの自由」というのが、人間の性なので、ある程度の義務（仕事）が必要で、そこから自由になろうとしてこそ楽しさがあるのではないでないか。

（2012年4月3日）

3 暇つぶし、ブログについて

私の周囲には、同年代ないしそれ以上で、メールもインターネットも使わないという人はかなりいる。来たメールに返事を書いたり、誰かのブログを読んだり、自分でブログを書いたりするとかなり時間がつぶれるので、暇になるとついパソコンの前に座ってしまう自分から考えると、メールやインターネットとなしでどうやって定年後の毎日が日曜日のような

退屈な長い一日を過ごすのだらうと思ってしまう。

その人たちは、何かしら趣味があったり、読書をしたり、テレビを観たり、運動したりして過ごしているのかもしれない。私の周囲には、週に4日以上テニスをする人、卓球をする人がかなりいる。

世の中には、面白いブログがたくさんあるようで、ブログランキングというものもあるそうだが、私の場合は、あまり人のブログを読むことはしていない。普段読むのは、藤原新世の会員制のサイトと内田樹のサイト、それに知り合いのいくつかのサイトである。

私の場合は、人のブログを読む時間より、自分で今思ったことをブログに記録を残すことの方が時間の方が長くなっている。

「先生はなぜブログを書くのですか。暇ですね。そんな時間があったら、もっと研究したらどうですか」と、(生意気な)教え子から言われたことがあり、それはいまだに気に入っている。でも今更私の齢で研究することもないし、また何かを書いて自分の考えをまとめて発信するということは、今求められている「主体的・対話的で深い学び」になるのではないかな、とひとり言い訳している。(2019年7月25)

4 老後の過ごし方に育ちが出る

私の小さい頃は、時代のせい、家が貧しかったせいかわからないが、家に風呂なく、何日か1度近くの銭湯に行った記憶がある(夏は、タライで行水の日も多く、銭湯に行ける日は限られていたような気がする)。大相撲があるときは、銭湯のテレビを見ようと横綱の取り組みの時間に合わせて、銭湯に行った。なんと庶民的なつつまじやかな生活であろう、と今は思う。

そう言いながら、今も同じようなつつまじやかな生活をしている自分を発見する時がある。育ちは隠せない。近所に「スーパー銭湯」のようなものがあり(名前は、「極楽湯」)、その無料券があるというので、娘に勧められ、お正月(3日)に夫婦で行った。何の期待もなかったが、行ってみたら、温泉ではないが、温泉場のようなたくさんの種類の湯場があり、結構楽しめた。さらに湯上りの場は、温泉場よりさらに広く、食事処になっていて、お正月ということもあり、多くの家族連れで賑わっていた。その光景は、まさに宮崎駿の「千と千尋の神隠し」の世界の賑わいであった。

お金持ちや育ちのよい人たちは、今頃、スキー場や山の温泉場で、本物の温泉に浸かり、おいしい料理に舌鼓を打っていることであろう。それに比べ、庶民の楽しみは、なんとつつまじやかなことか。千葉県に住み、銭湯に浸かり、その庶民の一員であることを、実感したお正月であった。(一方、放射能に怯える福島の人を思えば、自分の家に住み、近場の銭湯に行ける生活は、ぜいたくで、幸福な生活かもしれない)(2013年1月7日)

5 別荘地と老後の生活

ハレとケの違いは日常的にいろいろなところで感じる。時間的なことと言えば、休日（ハレ）と平日（ケ）の違いである。平日と休日は、やることも気分的にも全然違うというが多くの人の実感であろう。

ところが、職業によってこの区別のつきにくい人もいる。大学教員や作家などはその最たるものであろう。これらの職業の人は、休日も仕事を抱え、はっきりした休みがあるわけではない。本人は休日も仕事を自発的にやっているのだからいいが、その配偶者はたまったものではない。「一緒に生活していて、一番ストレスが溜まるのは作家の奥さんだ」というようなことを江藤淳が書いていた（「アメリカと私」）。

空間的なことと言えば、生活する場の建物と別荘地のそれとの違いに、驚くことがある。軽井沢の別荘地（特に旧軽）を散策して楽しいのは、そこの別荘地の建物が、普通に住んでいる地に建つ建物と違うからである。建物や庭へのお金のかけ方が、日常的に生活する場の家へのそれと全く違う気がする。別荘地のものは、贅沢と意匠を凝らしたものが多くある。ハレ（別荘）とケ（生活の場）では、金銭感覚が違ってはたらくのかもしれない。庶民の感覚からすれば、たまにしか行かない別荘地の家や庭に、贅沢の限りを尽くすのは割が合わない気がするが、その贅沢こそ、別荘族の誇りなのであろう。

千葉の御宿にも高台の地に、昔、西武が売り出した別荘地があり、立派な家が数多く建っている。先日そこを散歩してみて、その建物のセンスの良さに感心した。広い敷地に贅沢な建物が多く建っている。きっと、バブルの頃に、建ったものであろう。瓦は茶系のものが多く、統一がとれていて、雰囲気的には、ハワイの郊外を思わせる。

ただ、そこを歩いてみて、時代の移り変わり、今の時代も感じた。まず、人の姿をあまり見ない。車庫に車がある家が5分の1程度はあるので、住んでいる人はいると思うが、人影は少ない。わずかに出会う人は、老人ばかり。その別荘地の端に立派な老人ホームがあり、体が動けなくなったら、そこに入る予備の家に皆住んでいるように感じた。バブルの頃、平日に猛烈に働き、その稼ぎで、この地に贅沢を尽くした別荘を建て、退職してここに住まうようになったが、その時、夢見ていた引退後の生活がこのように寂しいものであったか、という寂寥感がその地を覆っていると感じた。

今、少子高齢化の時代で、地方（田舎）から若い人がいなくなり、老人ばかりの世帯になったと言われているが、別荘地にも同じような事態が生じているのではないのか。

若者や子どものいない、老人だけの別荘地ほど、さびしいものはない。その点、軽井沢やハワイは、若者や子どもも押し寄せる数少ない、現代に生き残った別荘地のような気がする。

われわれの生活は、ハレの場や時間とケの場や時間が、両方あるのが好ましい。しかし、老後になると、そのような区別を持つことが難しい。歳をとってからの暮らし方は、難しい。

（2013年2月23日）

6 軽井沢について

夏の避暑地というと軽井沢を筆頭にあげることができるであろう。軽井沢には他の避暑地とは何か違う格式や伝統や品がある。また新しさもある。植わっている木々にも上品さを感じる。旧軽に建つ古くからの木造の建物、手入れの行き届いたコケの生した庭、あるいは贅沢を尽くした新築の別荘など、日常の生活とかけ離れた非日常の世界がそこはある。日本にもこんな贅沢な生活を送っている人がいるのだと、傍を通るだけでため息が出る。

日本には上流階級が存在するあるいは日本は階級社会だと実感することが軽井沢に来ると感じることができる。同時にプリンスのアウトレットやハルニレテラスなどで最新の流行も味わうことができる。

私は上智大学在職中に、夏にはゼミ生と大学の上智軽井沢セミナーハウスに宿泊し、ゼミの合宿を開き、皆で広いゴルフ場の傍の道を自転車で通り、旧軽まで行き、別荘地を散策し、日本の階級社会の存在を実感した。上智の学生に軽井沢はよく似合う。軽井沢に親が別荘を持っている学生もいた。

軽井沢はセレブ的な嫌味はありながら、そのよさは拝金や成金的なところにはない。セレブがそのセンスや趣味のよさをさりげなく示し、それが自然や建築に現れているよさである。

ただ、経済的な豊かさがあつての軽井沢であることは確かである。日本の経済が停滞している現在、軽井沢の勢いや輝きが失われていることは確かである。軽井沢への憧れはもうなくなっているのかもしれない。軽井沢の別荘族の年寄りらの姿は寂しげであり、若者の表情にすがすがしさは感じられない。(2019年8月7日)

7 老後の時間志向 ー現在志向 過去志向、未来志向

時間軸で言えば、人は、特に老後はどこを見て生活しているのだろうか。社会学者の見田宗介の有名な価値の4類型を作る軸は、時間軸（現在志向か未来志向）と空間軸（自分志向か社会志向）の2軸がある。

井上揚水の「傘がない」の主人公は、それ以前の学生運動の若者が「未来」と「社会」を志向していたのに対して、それ以降の学生が「現在」と「私」を志向していると分析したのは副田義也である。今の学生達の好きな歌の歌詞を見ると「未来」を志向している歌が多いように思える。

私達の高齢者の世代は、時間的にどこに置いているのだろうか。未来に何か期待しているとは思えない。そうすると現在志向か、過去志向か。(2016年5月15日)

8 高齢者は日々どのように過ごしているのでしょうか？

高齢になり、現役を引退してからの毎日の過ごし方をどのようにすればいいのか、迷うことが多い。他の人はどのようにしているのだろうかと思う。

私の場合、あまり学校や大学の同級生や職場の元同僚の先生に会う機会がないので同世代がどのように過ごしているかの情報交換ができない。

高齢者が同級生や元同僚に会うと、その時の話題は3つあるという。①健康や病院通いのこと、②年金やお金のこと、③孫のこと、-何か、話題が狭く、さびしい。

私の場合、テニスや卓球で一緒する高齢者は多いが、そこでの話題は、そのスポーツのことに限られる。今テニスでは、大坂なおみや錦織圭のこと、卓球ではラケットのラバーのことなどが話題になるが、それ以上の話題に発展することはない。

私の周囲の大学教員の先輩たちは、私より高齢にも関わらず、研究意欲が旺盛で、次々文章や論文を書かれたり、本を出版されたりする方が少なからずいて、敬服の念を禁じ得ない。

中央教育研究所の理事会で一緒にいる鳥飼玖美子先生（立教大学名誉教授）より最近のご著書『子どもの英語にどう向きあうか』（NHK出版新書、2018. 9）をお送りいただいた。これからの子どもの英語教育に関して心配している母親たち向きに書かれた本であるが、その点に関する示唆的なことが語学や心理学や教育学の知識に裏打ちされながらわかりやすく書かれている。それだけでなく、日本の英語教育導入をめぐる明治以来の英語教育史が詳しく書かれている。大変感銘を受けると同時に、いろいろ歴史的なことを学んだ。

昔「モノグラフ高校生」の調査でお世話になった深谷昌志先生（静岡大学名誉教授）は隔月で奥様（深谷和子先生）と研究会を開催され、ニュースレターを配信されている。その中に深谷先生は、毎回、教育に関する古典のレビューを書かれている。それを読ませていただくと、自分がその教育学の名著を読んでいないことを恥ずかしくなり、今からでも読まなくてはならないと思う。

寺崎昌男先生（東大名誉教授）、谷川彰英先生（筑波大学名誉教授）、加藤幸次先生（上智大学名誉教授）、新井郁男先生（上越教育大学名誉教授）、有本章先生（兵庫大学教授）など、私などより年上の先生方が、次々と学術的な本を出版され、驚きを禁じ得ない。（2018年9月19日）

9 老いによる思考力や表現力の衰えについて

今日の朝日新聞の朝刊に池上彰は、14年間続いた「新聞斜め読み」の連載を自ら辞退した理由を次のように書いている。

「仕事の引き際は、難しいものです。いつまでも働けることはありがたいことです。でも、誰にも老いはやってきます。老いの厄介なところは、自分の思考力や表現力の摩滅に自

身は気づきにくいということです。いつの間にか、私のコラムの切れ味が鈍っているのに自身は気づかなくなっているのではないかという恐れから身を引くことにしたのです。いや、そもそも切れ味などなかったと言われるかもしれませんが。」(朝日新聞3月26日朝刊)。

同じようなことを感じることが多い。それは他人のことで、自分のことで。これまで凄いなと感心していた人(有名人など)の言動が、「かつての切れ味がなくなっているな」と思うことがある。また齢を取ると、自分の衰えに自分では気が付かないことが多い。体力や体調の衰えは、自分でもかなりわかるが、知力や表現力などの摩滅は自分では気が付きにくい。他人から指摘してもらい、自覚するしかない。(2021年3月26日)

10 齢をとっても柔軟に

一般に齢を取ってくると、体力の衰えだけでなく、気力も衰えてくる。気力が低下すると、外に出かけるのも億劫で、人に会うのも面倒になり、引きこもり気味になる。

また柔軟性を失い、頑固になる。この頑固さには、気を付けたい。テレビで見ていると、それほど高齢ではないが、「家族の乾杯」の笑福亭鶴瓶(1951年生まれ)や「にっぽん縦断こころ旅」の火野正平(1949年生まれ)などは、年寄りの頑固さより、柔軟性(一種のボケ、判断保留)が勝っていて、見ていてほっとする。この二人から学ぶものは大きいと思う。

内田樹は、年寄りの頑固さに関して、的確な指摘をしている。一部抜粋しておきたい。

<この人たちは「複雑な話」をする能力がなくなっているんです。中腰に耐える、非決定に耐える、年を取るとそれができなくなる。体力気力が衰えると、はやく腰を下ろしたくなるんです。中腰つらいから。老人になって、現場を離れたことでまっさきに衰えるのは、この力です。老人になると、確実に身体は衰えます。でも、心は衰えに抗することができる。それは複雑化するという事です。老いるというのは自己複雑化の努力を放棄することだと僕は思います。自戒を込めてそう申し上げます。(内田樹『『善く死ぬための身体論』のまえがき)。

藤原新也は、齢を取ると人の話に耳を傾けず、自分に入り込みようになり他者の話が耳に入らない「オタク傾向」に陥ることを警告している

11 高齢者と卓球

卓球というのは、なんと慎ましいスポーツなのかと思う。その使うスペースは、一部屋分にもならない。広大なスペースを使うゴルフと比べると何百分の1、いや何千分の1のスペースしか使わない。ラケットもボールも安いし、服装も地味である。あまり脚光を浴びることもなく、人気もない。

私は、家の近くの小学校の体育館で毎週日曜日の午前中に練習がある「卓球愛好会」に入れてもらい、気が向いた時に、参加させてもらっている。ただ、気が向く時があまりなく、月に1回、ないし2か月に1回くらいしか参加していない。したがって、腕は初心者並である。

世の中には卓球好きな人というものがいて、学生時代から卓球をやり続け、退職したいまもほとんど毎日卓球をしているという年配者もいる。その「卓球愛好会」には90代の人一人、80代の人3～4人いる。卓球は、手足だけでなく、目も使うし、健康によく、年寄り向きなのであろう。(2016年3月25日)

1.2 高齢者とテニス

今日(1月4日)午前11時からテニスの初打ちをした。平日の昼間からテニスや卓球をするというのは、大学教師や自由業の人でもやらないであろう。そのようなことが出来るのは退職した高齢者の特権である。

私の参加している毎週火曜日11時から2時間の「テニス打ち方教室」(千葉市長沼原勤労市民プラザ)は、参加者は暇な高齢者ばかり十数人だが(年齢の若い男性、女性もそれぞれ少数はいる)、どうも私が最高年齢のような気がする(実際は私より歳上は2人いた)。それだけテニスは、手首や腕だけではなく足も全身も使うハードなスポーツなのかもしれない。

私のようにテニスと卓球の両方をやっている人は少ない。それぞれどちらかに打ち込み、週に何回もやっている人が多い。昔はゴルフをやっていて今はテニスという人はかなりいる。昔ゴルフで今は卓球という人はあまり聞かない。ゴルフとテニスと卓球と、スポーツとしてどこが違うのか。使う面積や費用は格段に違い、何となく社会的格差—ゴルフ、テニス、卓球の順—があるような気がする。

青少年の頃のやったスポーツと年取ってからのスポーツは同じなのか違うのか、生涯スポーツという観点からそのようなことを解明した研究はあるのであろうか。私が生涯教育専攻の学生あるいは放送大学の学生だったら、そのような卒論を書くのと思った。

(2022年1月4日)

1.3 高齢者の相手をしてくれるのは野生の鳥だけ?

野生の鳥は冬は餌がなく困っていることであろう—そんな勝手な想像をして、昨日もう午後4時に近い夕方なのに、検見川浜にパンやご飯粒を持って出かけた(車で12～3分)。やはり夕方なので、昼間はたくさんいる鳩やカモメの姿は一匹も見えなかった。多くの鳥は

夕方 ねぐらに帰るのであろう。飛んでいるのは少数のカラスと、群れで戯れているスズメと、海辺に浮かんでいる鴨だけであった。雀は少しパンの切れ端を警戒しながら突つき啜えて飛び立つが、海辺の鴨は近づくと沖の方に逃げてしまう。

私のように鳥に餌をやる高齢者は時々いて、紙の袋から餌を出し、遠慮がちにあげている。老人の相手をしてくれるのは野生の鳥だけというのも、少しわびしい。その鳥も夕方にはねぐらに帰ってしまう。(2022年1月24日)

14 そここ居場所がない 寂しさ

昨日は、上智大学の大学事務局に用事があり、久しぶりに上智大学新2号館に行った。自分が20年間勤め、研究室のあったところが、今は自分の居場所ではない、というのは不思議な感覚である。自分がいなくても、自分がいた頃と同じような日常が滞りなく回っている。それは、一種のさびしさの感じでもある。

昔、10年勤めた武蔵大学に非常勤で行っていた時、ちょうど教授会が開かれていて、それが外から窓越しに見えたが、自分はもうその一員ではないし、どんなに懐かしくても、そこに入ってはいけないのだと知った時の、衝撃は大きかった。

もしかすると、それは、自分の死後、自分のいた家族や職場やさまざまな人間関係が、自分抜きで回っているのを、天から（あるいは地から）見る時の感覚かもしれないと思った。

(2012年9月14日)

15 自分史について

人はどのような時、自分史を書きたくないのであろうか。

自分のキャリアに一区切りついた時や寿命（死）を意識した時かもしれない。大学の教員の場合、定年で大学を退職する時、それまでの自分の業績をまとめ、最終講義を行い、大学を去る場合が多い。

私の場合、「学生文化への関心—自分の研究をふりかえる」という文章を『ソフィア 219号』（2007）に書いたことがある。

その3年後、20年勤めた上智大学を退職する時、「上智大学教育学論集 44号」（2010年）に多少記録を残した。

その10年後「教育展望」2020年9月号にも「私はなぜ教育の道を志したか」という自分史に近い文章を書いた（下記に掲載）。

またこの冊子も自分史の一部のような気がする。(2022年8月15日)

15 私は何故教育学の研究者になったのか ー自分史

私の場合、なぜ教育学の研究者になったのかと人から聞かれても、明確に答えることができない。気が付いたら、大学で教育学（教育社会学）を教えるようになっていたというのが正直なところである。

大学へ最初は理系に入学したが、自分には合わないと感じ、三年次に教育学部に進学した。私が学んだ1960年代の東大の教育社会学コースでは、主任の清水義弘教授は中央教育審議会の委員をしてマンパワーポリシーを先導していた。松原治郎助教授は「社会開発と教育」という本を出版し、社会開発への教育の役割を提起していた。両先生の関心はマクロな教育政策にあり、ミドルの学校やミクロな人の心理には向いていなかった。それらは私の関心を引かず、当時は教育の本は読まず、小説ばかり読んでいた。

大学卒業後の進路先も決まらぬまま大学4年の9月になり、中学校に教育実習に行った。当時たまたま木原健太郎著『教育課程の分析と診断』（誠信書房）を読んだ。教育社会学にもこんなに面白い本があるのかと思った。その内容は、木原教授が名古屋の小学校のクラスに入り込み、エスノグラフィーの手法で、児童の実態やその家庭背景を調べ、自ら作ったアナライザーも使い授業分析をするもので、学級の中で起こっていることが児童の生活のデータも含めて生き生きと描き出されていた。感激の余り小学校で調査の真似ごとをし、そのデータで卒論を書き、大学院に進学した。

大学院では、御茶の水女子大学の河野重男教授の演習もあり、「学校社会学」の面白さを学んだ。特に高校研究や生徒文化研究に興味をもった。6月に「東大紛争」が起り、ほとんど研究もしないまま一年間が過ぎ、短期間で「学級集団の研究」というテーマで、英米の学校社会学の研究を参照し、学級集団を教師と児童・生徒の文化葛藤からみる視点で、修士論文を書き上げた。

博士課程の時、私立の開成学園高校の「倫理・社会」非常勤講師として半年間、教壇に立った。当時受験競争の真ただ中の時代で、受験に翻弄される高校生の姿を目の当りにした。成績上位の生徒は受験中心の高校生活に何の疑問も抱かず、中位の生徒は受験を適当にやり過ごし、下位の生徒は無気力になっていた。

研究室の助手時代は、清水教授の科研費の研究「高校の適正規模の総合的研究」を手伝った。当時第二次ベビーブームの生徒の為の高校増設期で、どの規模の高校が適切かをデータで検証する時代になかった研究だった。全国の高校生のデータをもとに、高校の規模別に生徒の学校生活が違うかを検証したが、一定の傾向が見出せなかった。しかしそこに「高校間格差」という変数を投入してみると、はっきりした傾向が見出された。格差の上位の高校は伝統もあり指導が確立しているので学校規模が大きくなって問題がないが、新設校で大規模校を作ると伝統もなく教員の意思統一が出来ず指導が行き届かず生徒は荒れや不適應を起こしていた。この研究から、マクロな教育制度が、ミクロな生徒文化や生徒の学校適応と密接に関連していることを知った。

東京の中堅の武蔵大学に専任講師として勤めるようになって、ゼミの学生たちと、大学生の学生文化の特質をデータで明らかにした。たとえば学生の席の位置と受講態度や日頃の行動やファッションとが関係するという仮説で、33 教室で席別に 100 名余の学生の受講態度とファッション、日常生活を観察とアンケートで調べた。

上智大学に移ってからは、研究仲間と大学間の学生調査を四回実施し、学会発表、報告書、本（『キャンパスライフの今』,「大学とキャンパスライフ」）を出版した。文科省主導で高等教育の改革は急速に進んだが、そこに学生の実態に関する視点が欠けていると感じた。同じ大学生でも、大学の類型により、学生の学習動機も学生文化も大きく違っていた。学生の実態から大学教育のあり方を探った。

敬愛大学こども学科に勤め、教員養成の学科に入学してくる学生は、子ども好きで素直な学生の多いと感じた。遠隔授業で、学生に読解力、文章力のあることも知った。教員養成の大学が、学生を熱心に指導すれば、これからの日本の教育は安泰なのではないかと感じた。

私の研究を『学生文化・生徒文化の社会学』（ハーベスト社 2004 年）にまとめたが、主に調査データや生徒や学生の実態から教育のあり方を考えるものであった（『教育展望』2020 年 9 月号）

1 6 武蔵大学の同期会

昔教えた武蔵大学社会学科 31 期卒業生の 30 周年の同期会に招待され、懐かしい武蔵大学のキャンパスや江古田の町で楽しいひと時を過ごすことができた。

卒業後 30 年ということは、年齢的には 50 歳代の最初で、社会的にも一番油が乗り切って活躍している世代である。皆、卒業後はいろいろあったようであるが、立派にやっけて、昔の教員としても、感慨深いものがあった。

この世代は、私がゼミで大規模な大学生調査をはじめてやった時であり、その集計とまとめに多大な労力をゼミ生に強いた学年で、申し訳なかった気が、今はする。卒業生が、「あの調査がその後に仕事にも役立っている」と言ってくれ、武蔵の学生は人がいいなど、つくづく感心する。（2013 年 10 月 27 日）

1 7 上智大学 100 周年

上智大学創立 10 周年のお祝いの会が、四谷のニューオータニホテルであるというので、出かけた（11 月 1 日）。

上智を定年で辞めてから 3 年半が経つが、昔の知り合いの懐かしい人たちに会うことで出来たので、個人的にもいい会だった。

教育学科で同僚だった加藤教授、香川教授、平野教授、高祖教授（現理事長）、湯川教授、越前教授（神父）。当時の石沢学長・輝道副学長。学内共同研究でご一緒した先生たち。上智ローヤルテニスクラブのメンバー先生たち。上智のグラウンドのテニスコートで一緒にテニスをよくやった理工学部の先生たち。

それに、上智で開催した教育社会学会のシンポにも出ていただいた Anne McDonald さん（上智大学地球環境学大学院教授）が声をかけて下さり感激した。有名な渡部昇一教授も見かけた。卒業生は、浜名篤さん、大沢さん、竺原さんくらいしか来ていなかったのが少しさびしかったが、Madison・UW帰りのフレッシュな卒業生もいて、上智大学の伝統と未来を感じた。上智大学の発展を心よりお祈りする。（2013年11月2日）

18 さだまさし「いのちの理由」を聴く

「人は何の為に生きるのか」など「青臭い」ことを考えるのは青少年期で、歳を取ると段々そのようなことは考えなくなる。

ただ、「人のいのちを繋ぐため」という理由は、年老いてから自然に考えるようになるのではないか。それは、生物学的な意味だけでなく、それよりは社会的な意味で願うようになる気がする。自分の学んだもの、身に付けてきたものを、次の世代に伝えたいと願う。つまり教育ということだ。そのようなことを、さだまさしの「いのちの理由」という歌を聴いて思った。

<私が生まれてきた訳は 何処かの誰かに救われて/ 私が生まれてきた訳は 何処かの誰かを救うため/ 夜が来て 闇自から染めるよう 朝が来て 光自ずから照らすよう/ しあわせになるために 誰もが生きているんだよ/ 悲しみの海の向こうから 喜びが満ちてくるように/ 私が生まれてきた訳は 愛しいあなたに会うため/ 私が生まれてきた訳は 愛しいあなたを護るため>（一部抜粋）（2016年7月24日）